

沖縄法政研究所 第42回講演会

紛争と平和

～沖縄から私たちが世界に出来ること～

30年の国際協力、緊急支援の最前線から見てきたもの
街づくり、人のつながりが平和へとつながる！！

講 師：田中洋人

特定非営利活動法人 JADE－緊急開発支援機構理事長

開催日時：2019年7月13日（土）14：00～16：00

会 場：沖縄国際大学13号館 3階301教室

【開会】

○佐藤学 沖縄法政研究所所長／沖縄国際大学法学部教授

本日は沖縄法政研究所第42回講演会にお越しくださりありがとうございます。これより「紛争と平和～沖縄から私たちが世界に出来ること～」を開催いたします。

本日は講師に特定非営利活動法人JADE-緊急開発支援機構理事長の田中洋人さんをお招きしました。田中さんと私は那覇市の街づくりの活動で知り合いました。始めは田中さんがどういうお仕事をされていたか一切知らなかったのですが、外国における難民、あるいは国内難民の問題と地域の街づくり活動が、実は繋がっているというお話をうかがい、非常に感銘を受けました。田中さんはこの30年間、国際人道支援に携わり、希有な経験されてきた方で、沖縄のもっと多くの方たちにもぜひ田中さんの経験を知っていただきたいということで田中さんにもご快諾いただき、本講演会を企画いたしました。

開始に先立ちましていくつか連絡事項がございます。

お手元に地図資料を配布しております。田中さんが行かれた土地で撮られた写真をスクリーンで見せていただきますが、あまり馴染みのない土地の名前がいろいろと出て参りますので、そのときそのときでお手元の地図も参照しながら話を聞かれ

てください。

また、一昨年度から法政研究所の講演会、シンポジウムの中では手話通訳をお願いいたしております。今回も、一般社団法人沖縄県聴覚障害者協会沖縄聴覚障害者情報センター様から3人の手話通訳者の方々、森田清人様、鈴木智子様、宮平絹江様にご協力いただいております。

それから注意事項といたしまして、スマートフォン携帯電話等の電源はお切りいただくマナーモードをお願いいたします。また、私どもは沖縄法政研究所の記録を残す目的で動画を録っておりますことと、事前に申し出があってテレビ局の取材が入っていただいています。それ以外の私どもが掌握できないかたちでの録音、録画等のご遠慮ください。

取材されている方にもお伝えしておりますが、手話通訳の方、参加者の方々のお顔も映らないよう撮影をお願いします。

それでは、私たちが国際ニュースで聞く土地にことごとく行かれている田中さんのお話を伺いたいと思います。田中さんよろしくをお願いいたします。

○田中洋人（特定非営利活動法人JADE-緊急開発支援機構理事長）

みなさんこんにちは。暑い中、遠路でもないかもしれませんが来ていただきありがとうございます。佐藤さん、ご紹介ありがとうございます。まず、はじめにお手元のレジュメを見ていただいて、今日は1から8の項目で進めさせていただきます。

〈レジュメ〉

1. はじめに 国際協力に携わったきっかけ、生い立ち等
2. 第2次大戦後の紛争の特徴とパターン：70～80年代、90年代～21世紀始め、その後
3. 途上国の開発の遅れ：誤った開発政策、貧困層対策が遅れる
4. 複雑化し、複合化する紛争：テロとの戦い、非対称の戦い
5. 世界中で大規模災害が多発
6. 格差の拡大、分断の拡大：IT、金融工学等の技術革新により貧富の格差が究極化
7. 街づくりと人づくり：人が街をつくり、街が人をつくり、平和な国をつくる
8. 沖縄からできること：アジア、東南アジアとの近さを生かした平和の拠点

スライドをお見せしながらいろいろと説明をしていきたいと思います。最後までお付き合いいただければ幸いです。最後に質問等、コメントとか文句とかいうコーナーありますので、ぜひ質問があったら聞いてください。どうぞよろしくお願いいたします。

国際協力に携わったきっかけ

なぜこういう国際協力に30年間に渡ってどっぷり浸かってしまったのかということを紹介させていただきます。

私は東京生まれなのですが、小学校の頃から父親の仕事の関係で、海外で暮らすことが多くありました。父親は電子部品メーカー勤務のサラリーマンでしたが、当時、日本の経済が拡大し、世界に進出している時期でした。おそらく最初に海外に出ていった第一波じゃないかなと思います。数多くのメーカーがソニーや東芝などとともに関係に進出していました。

私は最初、アメリカのテキサス州エルパソという、よく西部劇に出てくる町に、小学校1年生から4年生までいました。当時は70年代前半で、西部とか南部はまだ保守的な街で、時に小さな子どもの私に対しても「リメンバー・パールハーバー」とかって言われることもあって、「なんだそれ?」「ハワイのパールハーバーぐらいはわかるけど、でもリメンバーってなんだろうな」と。もちろん「覚えてろ」ってことはわかるんですけど、何を覚えてろというのかは、当時の私は戦争のことなど知らなくて、子ども心に何と云うかすごく戸惑った覚えがあります。

その後、日本に帰って来たのですが、父親の仕事の関係で今度はブラジルのサンパウロに行きました。ちょうどその時、日本から笠戸丸がブラジルのコーヒーで有名なサントス港についたというブラジル移民が始まって70年という記念の年（1978年）で、今の上皇上皇后両陛下が当時皇太子ご夫妻のときにいらして、日系人社会が大騒ぎしたことを覚えています。今年、眞子様が120周年のお祝いに行かれたと聞いて、あれから40年が経つのかと年月が流れるのは早いなと思いました。

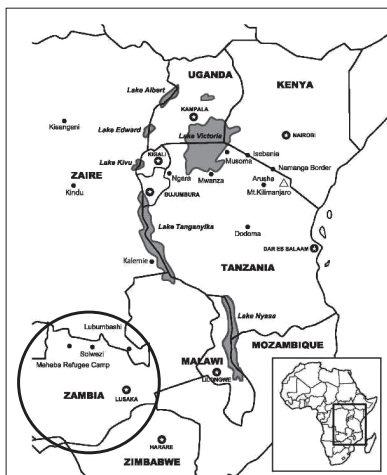
そんなこともあって、海外に行くのは抵抗がなかったのですが、なぜ国際協力を選んだのかというと、理由は二つありました。最初のアメリカ体験で「リメンバー・パールハーバー」という言葉で戦争問題に気付かされたということと、ブラジルの

貧民街を見たときに自分に何ができるのかと思ったからです。と言いますのも、ブラジルにいた時、サンパウロの郊外にある日本人学校に毎日30分ぐらいかけてスクールバスで通っていました。リオ・オリンピック（2016年）でも話題になったのですが、ブラジルにはファヴェーラ（favela）という貧民街がいっぱいあるんですね。リオのコルコバートのキリスト像の下にも沢山あります。サンパウロのそれは雨が降ったら道はグチャグチャになるし、家は段ボールとベニヤ板で、屋根もないようなところに、私より小さい子どもたちが半裸で暮らしていました。その時に、自分に何が出来るのだろうと思ったことを覚えています。また、自分は戦後生まれですが、戦中生まれの子がファヴェーラに「20年、30年前の日本を見ているようだ」って言ったんですね。ふと思ったのは、サンパウロとリオとか巨大なブラジル都市を知っていて、都市としては日本もしくはそれ以上の発展をしているわけですが、じゃあ20年、30年後になったらファヴェーラ、貧民街は無くなって、20年、30年後にはブラジルも発展するのかなと思ったら、なんか違和感を覚えたのです。

大学生でボランティア 難民キャンプでの井戸掘り

それはそのまま違和感として残っていき、1984年の私が大学受験の時に、エチオピアで飢餓というのが起きたんです。

去年、今年と有名になった映画でご覧になった方も多いと思うんですけど『ボヘミアン・ラブソディ』。このクイーンの歌『ボヘミアン・ラブソディ』が歌われた「ライブ・エイド」という、世界的にアフリカの飢餓を救うというチャリティーコンサートの生中継を日本で見たりして、私もそんな中でアフリカに行きたいな、見てみたいなと思ったんです。大学に入ってからある時、新聞でアフリカのザンビアの難民キャンプで井戸掘りボランティア募集という記事が大き



地図1 Great Lakes and Southern Africa

く載っていて、これは行くしかないぞと思い、19歳の時に応募したら受かりまして、大学2年生の時、代々木のオリンピックセンターの一角で井戸掘りの研修をして現地に行きました。

この井戸掘り技術は上総掘りという千葉県の上総地方に伝わる代々続く古い技術で、最大2,000メートル程度は人力だけで掘れるというすごい技術を使って難民キャンプで井戸を掘ろうという、今思うとすごいことをしたんだと思います。

私が派遣されたのは半年後の87年2月からですが、当時70年代、80年代というのは東西冷戦の真っ盛りで、私が携わったザンビアでは、モザンビーク難民、アンゴラ難民、ザイル難民というのが一緒に暮らしていました。

地図1の左下の方にザンビア、その少し上にソルウェジ（Solwezi）というのがあり、横にメヘバ（Meheba）、字が小さくて申し訳ないんですけども、国境から約100キロ。首都のルサカ（Lusaka）から800キロ、丸一日かけて車で行くという所で、そこの難民キャンプで井戸を掘りました。

入ってきたばかりのザイル難民、アンゴラ難民、モザンビーク難民がなぜ一緒に暮らしていたかという、ザンビアは社会主義国だったのですが当時のカウ ندا大統領が「人間の顔をした社会主義」というのを標榜していて、一方で南アフリカではまだアパルトヘイト政策を続けていたので、その反アパルトヘイトの盟主みたいなことで、周辺国から難民を受け入れていたのです。同時に難民の中に反政府ゲリラのリーダー格の人もいたりして、そんなこともあってザンビアは難民キャンプだけではなく反アパルトヘイト、もしくは反独裁政権の拠点になっていました。キャンプにはときどきソ連製の戦闘機MIG-21が飛んできて偵察していくこともありました。MIG戦闘機は日本ではなかなかわからないと思うんですけど、「キーン」というものすごい高い音で飛んでいきます。アメリカ製のジェット戦闘機は「ゴーッ」とかっていう音なのですが、MIG戦闘機は音がすごく違っていたのを覚えています。また、多分、南アフリカのコマンドー部隊じゃないかなと思うのですが、ときどきヘリコプターが飛んできたりしていました。私が居たときはなかったのですが、南アフリカのコマンドーが来て元ゲリラとか亡命者とかを暗殺しに来たり、反アパルトヘイトのANC事務所を爆撃することもあったりしてけっこう物騒でした。

私が行った頃にはアンゴラの内戦の激しい時で、アンゴラにはキューバ軍や東ドイツ軍も派兵していて代理戦争というところか、一部、東西戦争していたという感じがありました。

そのあと、半年間、難民キャンプで働いて、ヒッチハイクでアフリカ各地を回りました。モザンビークに潜入して、潜入と言っていますが、ちゃんとピザ取って行きました。写真1の右側は全部地雷



写真1 内戦下のモザンビークでトラックに便乗

原です。地図でいうと地図1のモザンビークの東の方に、パイラという港町があるんですが、そこまでトラックで行きました。途中まで装甲列車、貨物列車が全部装甲されて機関銃の台がついているすごいやつに乗っけてもらったのですが、それが途中で止まってしまったので、そのあとはトラックに乗せてもらいました。なぜ地雷原だとわかったかということ、途中でおしっこタイムがあったのです。みんなトラックから降りて行くのですが、私は少し恥ずかしかったので別の所へ行ったら、後で「お前そっち地雷原だったぞ」と言われて。うわ、怖かったなと…もしかしたらもうここには居なかったかもしれないですね、あのとき一步間違ったら…というようなことがありました。

今度は逆に北の方に行き、タンザニアからザンビアに向けて当時の中国政府の援助で作ったタンザン鉄道に沿ってヒッチハイクしながら向かいました。この鉄道は万里の長城より長いということで、中国人もえらくプライド持って宣伝していました。写真2の歩いているここが駅なんです、途中で車が故障して止まっちゃったんです。一日待っても動かないんで、もうしょうがないなってみんなで歩いていて、ここからまたヒッチハイクしたっていうとこなんです。なので鉄



写真2 タンザニアとザンビアを結ぶタンザン鉄道

道の見かけは新しく良いんですけども実際はダメだったなど。今、一帯一路を世界中でやってますけど、こういうこともあるのかなというふうに思っています。

卒業、就職、イギリスの大学院で勉強

ザンビアから帰国し、大学4年になって、就職しました。全国紙の記者です。こういう危ないこととかやっていると、記者はとても刺激的な仕事なんですけどもそれ以上の刺激を求めてしまって、私としては消化不良を起こして、イギリスのロンドン大学の大学院で勉強することにしました。そこで勉強している最中に、ソマリアの危機が起きるんですね。多くの紛争というのは、独裁政権に対して社会主義の武装勢力とか、反政府勢力が立ち上がって内戦になるんですけど、ここは逆に、社会主義政権だったソ連が崩壊したので、その後押しがなくなった為に社会主義政権が崩壊して内戦状態になってしまったんです。

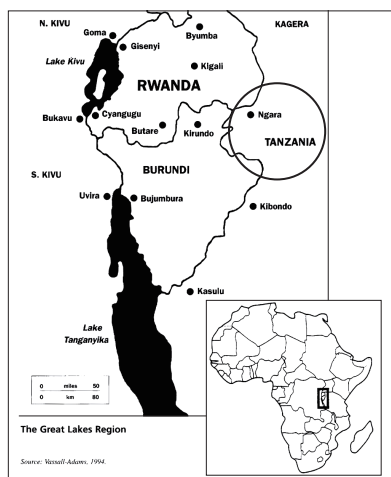
当時1993年の4月にイースター休暇で大学が10日くらい休みだったのでソマリアに調査に行ったのです。その時は食糧配給所での支援を見たりとか各地で調査をして思ったのは、政権が崩壊して破綻国家となり政府が機能なくなると武装勢力などが国を分割して統治してしまう無政府状態になる。武装勢力が支配する、首都のモガディシオの一角では、トラックから通行税を取って、それを戦費とかにしていたんですね。この後、『ブラックホーク・ダウン』というリドリー・スコット監督の映画にもなりましたが、アメリカのヘリコプターが、武装勢力に撃墜されアメリカ軍兵士がリンチにあって殺されて遺体が吊るされるという悲惨な事件がありました。それをきっかけにアメリカ軍がソマリアから撤退してしまって、また内戦が酷くなってしまうしました。私が行った頃はそこまでひどくはありませんでしたが、段々治安が悪化する状況下で援助関係者、国連が中心になっていろんなNGO、国際機関が入って活動していました。食料や水がどれだけ足りないか、どれだけ人が難民キャンプに入ってきたとか、国内避難民キャンプはいつ完成するのかなというようなことを援助調整会議で情報交換していました。今のようなEメールが無い時代は毎週何回も顔を合わせて情報共有するということが不可欠でした。援助関係者は現地へはケニアの首都ナイロビから空路、ビーチクラフトというアメリカ製の10人乗りの小さな飛行機をチャーターして移動していました。

ルワンダ難民緊急援助

大学院が終わった後、日本に帰えるとザンビアで仕事していた団体が「またザンビアで手伝わないか」と言われて再び参加しました。しばらくして現地からルワンダで大変なことが起きている、たくさんの難民が出てると知らせてきました。とても悲惨な状況なので助けに行かなきゃいけないっていうことになったのですが「ところがどっこい」という驚きの話がこれから続きます。

まずは、私は地図2の右にあるタンザニア、その北西部にあるンガラ (Ngara) という町に行きました。そこに大きな難民キャンプが最初に出来ました。そこから陸路でずっと北上して行ってウガンダを経由して、今度は南下してルワンダに入りました。その時に、首都キガリ (Kigali) の郊外ですけど、村というかちょっとした町なんかがありました。全然人がいないのです。人っ子一人いなくてゴーストタウン状態だった。キガリから30分、40分くらいの所なんですけど誰もいなくて、どうしたんだろう…と。キガリに入ると、銃撃戦の跡が残っていて内戦の様子が窺える状態でした。

そもそもなぜこういう事が起きたかというと、1999年の4月6日夜にルワンダ大統領機がキガリ上空で撃墜されてしまったのです。犯人は何者か分からないんです



地図2 ルワンダと周辺国

けれども、それをきっかけに対立していた部族同士の戦いが再開しました。当時も内戦状態ではあったのですが、一応、国連平和維持部隊が入って平和を維持していました。そのルワンダはフツ族、ツチ族という大きな民族が2つありフツ族が8割、ツチ族が2割というかたちで、フツが政権を取っていったんです。それに対して迫害されたり、人権侵害されていたツチの人達が反発してRPFルワンダ愛国戦線 (Rwandan Patriotic Front) というのを作ってゲリラ運動をしていました。その和平交渉のためにハ

ビャリマナ大統領がタンザニアへ行って、帰ってきた矢先に上空で撃墜されてしまったんです。そこから民族対立、紛争が激化して、だんだん悪化していったんです。そのことは日本にいた時から分かっていたのですけれども、難民を助けに行かなければいけないということで乗り込んだのですが、本当の状況は行ってから分かりました。

ここは地図2でいうと、ルワンダの左横にある黒いのがタンガニーカ湖ですが、その上にあるゴマ（Goma）に二番目に難民が大流出したんです。難民が最初に出たのはンガラで、まずそこに難民が大流出して最初は20万人、その後、最終的には80万人くらいになるんです。私はちょうどゴマに難民が流出して2週間ぐらい経った時に入ったのですが、とても悲惨な状況でした。ルワンダからザイールの国境を越えて行きましたが、そこを越えたら何やらモアモアして霧みたいなのがかかっている、窓を開けたらものすごく臭いんです。養豚場かと思うぐらいの感じで、何だろうと。それにいろんな所に石が積んであるんです。どれも一セット3つの石が積んであるんです。石が本当にきれいに積んであるんです。何かのおまじないかな、結界でも作ってるのかなと思ったのですが分かりませんでした。さらにゴマ市内に入っていったら、何十万人っていう難民が立錫の余地もなく立っているんです。何で立っているかという溶岩地帯のため、地面がゴツゴツしていて痛くて座れないので、立ってウロウロしてるんです。そうするとほこりが舞って、しかもトイレが無いものですからみんなそこで排泄をしてるんです。だから糞便の臭いで養豚場みたいな臭いがしたのです。さっきの3つの石は釜土です。鍋釜を置くために3つ石を置いて、その上に鍋とかフライパンとか置いて煮炊きをしたらいいんです。民家があっても、ほとんどの家は難民に占拠されてしまって元の住民はもう居なくなっていました。

テントを張っても溶岩の上で硬いので、地面の上に横にもなれないんです。水も全く無いので、フランスの外人部隊が空輸した給水タンクローリーに難民が殺到していたり、足りないときはエビアンミネラルウォーターのペットボトルを配っていました。相当高い支援のコストだなと思いましたが、そんなことまでしていました。

その後私は、タンザニアのガラに戻って水の仕事を開始しました。ウォーターポイントといいます、キャンプには水源が一カ所しかなく、みんながそこに取りに

来ていましたが、そうすると水は足りなくなるし遠くから来なきゃいけないしと、多数の難民は水に困っていたので、井戸を掘るというプロジェクトを計画しました。

少し紛争の話に戻りますが、さっき言ったようにフツ族とツチ族が対立して、フツ族がツチ族を虐殺しましたが、難民はフツ族です。普通だったら難民は虐殺をされて危機を感じて逃げて来るツチ族じゃないかと思うんですけど、それが逆だったんです。虐殺されたツチ族が逃げるんじゃなくて、虐殺したフツ族のほうが、殺して逃げてきたという、理解できない状況だったんです。というのは、虐殺をした指導者、その武装勢力が自分たちの勢力維持のためにフツ族の住民を難民として引き連れて、国を空っぽにしてしまったんです。

一方でツチの、後で大統領になるポール・カガメ、その時は副大統領だったんですけど、新しいツチ族中心の政権が出来たので、その前に内戦で難民として逃げていたツチ族の難民はどんどん帰って行きました。ザイールには、たくさんのフツ族の難民が流出しました。帰る難民がいる一方で毎日のように、ガラの町外れの国境地帯を何千人もの難民が荷物を担いで歩いて来るんです。難民は最初、トランジットセンターに収容、登録されてキャンプに送られるのが手順です。そうこうしているうちに8月には難民の3回目の大流出が起きます。位置的にはゴマのずっと下のブカヴという所で、ルワンダの国境の町チャンググというところで私が行った時はザイールに出られるように家財道具や家畜とかを持って多くのフツ族住民が待機していました。

国際法的に難民は難民条約上、国境を越えた人たち難民^{レフュージ}refugeeといいます。つまり、難民は国境を越えないと難民とはみなされず、国にいる間は国内避難民という状態で異なります。地震が起きたり津波が起きたりして被災した人も難民といわれていますが、国際法でいうと間違っています。その人たちは国内避難民、もしくは避難民となります。というのも、難民は国際条約で保護される存在だからです。難民条約は日本も加盟していて、この条約で国際的に保護されて国連難民高等弁務官事務所が保護してくれますが、国内避難民というのは基本的には国際法上は保護されません。つまり国があるので、その国が責任を持ってちゃんと、保護しましょう、支援しましょうっていうことですけど、なかなかそうはいかないので、2016年に国連のシステムが変わり、それまで国連ではなく準国連機関みたいなところだっ

たのが格上げされてInternational Organization for Migration (IOM) 国際移住機関が国連組織になって、そこが一応、国内避難民や移民をメインに扱うということになりました。そういうこともあって、国内避難民も国際的に支援されるのが最近の流れです。

多数のフツ族住民を引き連れて難民キャンプに来たフツ族の虐殺者が、結局何をするかというやっぱり悪いことなんです。例えば元少年兵は昼間から麻薬でうりっている。彼らはおそらくたくさんの虐殺をして逃げて来ていたはずです。

ザイル側に逃げた元少年兵も、タンザニア側に逃げた元少年兵もキャンプでは何もすることがなくて、この年の終わりにはついに難民キャンプで戦闘訓練を開始しました。もちろん銃とかは持ち込み禁止ですから、国境地帯に隠してきたっていうんですけども、マシェティといわれる蛮刀、刀の太いような短いものやこん棒を持ってみんなで訓練していました。だんだん、難民キャンプがゲリラの基地化していきました。そして、国連による武装勢力を使つての難民キャンプの管理・運営も進みます。それに対して反発するNGOも出てきて、実際、撤退するということも出ました。当時、国連難民高等弁務官は緒方貞子さんと、彼女はこういうことは「難民保護のためにはしょうがない」と言っていたようです。結局、私が居たキャンプだけでも30万人、周囲を含めると80万人もいて、援助関係者だけでは数が少なく支援を実施出来ない。結局、武装勢力の助けがないと難民キャンプを維持できないという、すごい破綻した理論ですが、そういうことで彼らが難民キャンプを支配していきました。

一方で、ルワンダはツチ族中心の新政権が出来て、虐殺に関わってない人は帰りたいと言いはじめた。農民がほとんどなんで、早く畑を耕したい、もしくは家畜の面倒をみたい、というのです。でも、その人たちは武装勢力に殺されちゃったり、リンチにあつたりとかして、だんだんキャンプは強制収容所状態、しかも自分たちのリーダーが強制収容所を管理をするという恐ろしい形になってしまったのです。

多くの援助関係者はすごいジレンマに陥ってしまいました。助けなきゃいけない、でも助けるためには自分たちの力で足りないから虐殺犯である武装勢力と関係を維持しないといけない。もしくは助けてもらわなきゃという、すごい矛盾でした。この話はタブーでした。みんなわかっていてやっていた団体が多いんですけど、みんな

なそれがトラウマと罪悪感としてずっと引きずっていて、今もそれを表に出して話せない状況があるようです。ただ、この中でたくさんの学びもあったので、今では必ず援助調整をするとか、中立を保つとかいろいろなかたちで変わりました。先ほど話した国連の援助調整会議セクターごとに水だとか、食料、食料以外の物資、医療とかに別れている。あと当時はいろんなものが重複して援助物資として入ってきていましたので、要らないものはいらない、足りないものはちゃんと持ってくるということで、今ではスフィアスタンダード (sphere standard) というものになっています。これは最低限、難民として何が生きていく為に必要なのかとか、テントの広さだとか、水を1日何リットル、今は15リットル、食料は2,150キロカロリー分を提供しますとか、ルワンダ難民援助をきっかけに援助の国際的基準が作られていきました。

あと、国際赤十字が中心になって、Code of Conductという行動基準を作って、武装勢力に加担しないとか政治に加担しないとかいうようなことを宣誓し、署名して団体として登録するというきっかけにもなりました。多くの学びがあったのですが、まだまだちゃんと援助機関全体として総括・整理されていない事柄でもあります。

構造的暴力としての貧困 最貧困国のバングラデシュで

次に移ったのがバングラデシュです。その時は、国連の世界食糧計画WFPだったんですけども、その時は食料を賃金代わりにしたフード・フォー・ワーク (food for work) というんですが、貧しい農村の人に働いてもらって農村開発をしていました。ご存じの通りバングラデシュは世界最貧国のひとつでもあって、毎年サイクロンと洪水の被害がでる。今も大雨でロヒンギャ難民の人達が非常に大変な思いをしているという報道がありますが、少しでも改善しようということで、用水路を造ったり堤防を造ったりということをしていました。

やはり、最貧国として貧しい人たちが多いということは、ある意味、社会不安に繋がっていくんですね。だから災害、特に毎年自然災害でやられると、気持ちが荒みますし、せっかく生活を再建しようとしても何度も家が流されちゃったりすると、これは社会がいけない、政府が悪いんだ、アメリカが悪いんだという、こじつけですが過激な思想が入ってきたり、そういった論理を言う人がいるので、そういう人

たちに踊らされてしまう人たちがいるということがわかってきました。

日本だと水害だとせいぜい1週間くらいで水が引いていきますが、バングラデシュの首都ダッカの中心地は低地でベンガル湾もすぐ先なので水がどこにも引かず、3か月間も水に浸かる状態です。バングラデシュの平均的な標高は大体9メートル、10メートルと言われていて、本当に標高に差がありません。私も10階建てのマンションに住んでいて、1階が駐車場なんですけど、2ヵ月間、自分の車を別の高台に逃したっていう経験があります。

コソボ難民緊急支援（アルバニア1999年）



地図3 コソボ自治州と周辺国

バングラデシュ支援をしている最中に、1999年のコソボ危機（コソボ紛争）というのが起きました。背景には、もともとあったユーゴスラビア連邦が、冷戦の終了と同時に崩壊してしまい、連邦がクロアチア、ボスニア、セルビア、モンテネグロ、アルバニア、マケドニアに分かれてしまったのです。分かれるだけならいいのですが、第二次大戦後は連邦として自由に行き来して暮らしてい

たので、実は多数の民族がどの地域もオーバーラップしてしまったんですね。連邦の崩壊後、それぞれ独立していましたが、自分たちの民族の政權で国を支配すると、重なっている、それぞれの国では少数の住民である、セルビア人、クロアチア人、モンテネグロ人とかが邪魔になってきたのです。それで旧ユーゴ紛争が起きて、虐殺や民族浄化とかが起きたんですね。コソボ危機というのは地図3の中央に位置するコソボ自治州で起きたアルバニア系住民との武力紛争のことをいいます。アルバニア系の人たちの国はアルバニアとしてもあるんですが、コソボにも多く住んでいて、セルビアとモンテネグロ、マケドニア、アルバニアで広く暮らしていました。連邦崩壊後、セルビアとモンテネグロの軍はアルバニア人を迫害したり、人権侵害をしはじめました。それに対してコソボ自治州に住んでるアルバニア人が立ち

上がって、コソボ解放戦線というのを作り内戦がはじまります。コソボ解放戦線といっても大した戦力もなく、やられっぱなしで多くは難民として周辺国に逃げるんですが、それに対してアメリカを中心としたNATO軍が、セルビアに空爆をして、それで紛争はなんとか終わるのですが、それがきっかけでたくさん難民が出ました。私は地図3の下の下にあるギリシャとの国境地帯にある町に派遣されましたが、すでに多くの難民がいました。5千人ほどがこの地域に難民として入り、廃屋というか廃工場の倉庫や体育館に何の援助も無く寝泊まりしていました。

そのあとNATO軍部隊がやって来て、ドイツ軍がキャンプを設営して、食料をオランダの海兵隊が来て運んでくれました。ここがすごいんですけど、ある朝突然無線で私の名前が呼ばれ「お前のことをオランダ海兵隊が呼んでいる」と言われ行ったら、トラックと装甲車で100両以上の車列がドーンと街の中心にいます。とりあえず、あなたの隊長は誰ですかと聞いたら、隊長だという小柄の女性大尉がやって来て「ミスター・タナカ、あなたを探していました。あなたの食糧を持ってきました。」と言って、はるばる200キロ離れた東の港町から運んでくれたという状況でした。

東ティモール緊急支援 (1999年)

私はこの後、東ティモールに移りました。東ティモールは1999年にインドネシア軍と民兵による虐殺が起きて、国連軍が派遣されたわけですが、そもそも東ティモールは、1975年まではポルトガル領だったのですね。ポルトガルという国は結構いい加減で、さっきの話しても出てきましたが、モザンビークもそうですし、アンゴラも元々はポルトガルの植民地です。ポルトガルの植民地が、なぜみんな大混乱になったのかというと、1974年に軍事クーデターが起きて王政が廃止されたんです。廃止されたのはいいですが、なぜかクーデターで政権を握った軍人たちは、植民地はもういりませんって言ったんですね。普通だったら、経過措置があって徐々に政権を移譲していくんですけど、そんなことをせずに、あと1ヵ月で植民地廃止します、あとは自分たちでやってくださいねと、いったんです。その後何が起きたかというと、それまでの独立運動が急に盛り上がったのはいいが、互いに殺し合いを始めて内戦状態になっちゃうんですね。それにインドネシアが危機感を持ち、こう

いうことにパワーバ
キュームが出現して
しまうと、結局、共
産主義、ソ連とかが
入って来るかもしれ
ないという事で、占
領してインドネシア
領としてしまうんで
す。反発する東ティ
モール人に対してそ



地図4 東ティモールと周辺国

の独立運動を阻止しようとインドネシア軍によって人権侵害が起きます。

セバスチャン・ゴメスという反インドネシア政府というか東ティモール独立運動の活動家の若い男性が1991年1月にインドネシア軍に殺されて、その葬式に來た人が独立運動のデモをはじめ、それをインドネシア政府軍が攻撃して250人以上が殺されるという大事件が起こるんです。それをきっかけに国際社会が介入し、インドネシア政府に圧力をかけて、何とかしようというふうになったんですね。最終的に、インドネシアも政権交代しますが、大統領が変わって民主化というわけではないんですけれども、少し柔らかくなってきて、東ティモールで住民投票しましょう、ということになったんです。住民投票は独立するかもしれないもしくはインドネシアと併合するかという二者択一だったんです。その選挙前に、インドネシアは条件として、「独立するのはいいよ」と、「まあ君たちがしたいようにしなさい。だけど自分たちインドネシア政府は、長い間、東ティモールに投資したものは引き取らせてもらおう」と言ったんですね。それが何かということとは分からないまま、東ティモール人は投票しました。国連が選挙監視に入り、結果、約98パーセントの人が独立に賛成でした。その後すぐに焼き討ちや虐殺も始まってしまい、インドネシア軍と併合派は根こそぎインフラを破壊してしまったのです。つまり元に戻したというか、インドネシア政府が持ってきたり建築したりしたインフラや建物を全部破壊してしまったんですね。だから本当に何もなくなってしまって、もう無から始めなきゃいけなくなってしまいました。そういうこともあり国連が介入してUNTAET（United Nations

Transitional Administration in East Timor) といいますが、国連東ティモール暫定行政機構というものを作って、同時にオーストラリア軍主体のPKO平和維持軍が入って一時的に国連が東ティモール全土を支配、統治するという事が3年ほど続きます。

問題はその後なんですけども、東ティモールにはたくさんの女性ゲリラがいました。というのは、もともとの人口が少ないので男性だけでなく女性もゲリラになることが必要だったんです。ある元女性ゲリラと直接話したことがあります、彼女は男性ゲリラと結婚して子どももいるんですけど、旦那さんは戦死したのに支援策が全くなくて、自分でキヨスクみたいなちっちゃな店みたいなのをやっていました。18歳で女性ゲリラ兵士になった彼女は20何年かずっと戦場しか知らないのて手に職もないし、結局、そんなことをして生きるしかないんですね。男性ゲリラ兵士の犠牲も多かったのも事実です。寡婦となった妻たちもそんなに手に職を持っているわけではないので、洋裁や伝統的な機織り工房というのを国連などが提供して、職業訓練をしていました。

アフガニスタン平和構築支援 (2001年)

9.11事件以降、今までにない新しい複雑な紛争・テロが世界各地で発生

次に私はアフガニスタンに行くことになりました。冷戦後は宗教問題、民族対立問題という冷戦時代の問題が噴き出たんですけども、9.11を契機として世界各地でテロが発生して全く様相が変わりました。現在の多くのテロというのは、ちゃんとした組織があったりとか、ちゃんとしたグループがあるわけではなくて、一人でもできるし、とりあえずやっちゃう、という場当りのなものも多い複雑で複合的な要素を含んでいてなかなか難しい問題ですが、犠牲者は相変わらず多く女性、子どもが多い。しかし、治安が安定しないのでなかなか支援が入るのが難しい、復興が難しいという、非常に困難な状況が発生しました。

アフガニスタンは9.11以前といいますが、1979年にソ連が侵攻して社会主義政権を建てるんですけども、それまでは、東西を結ぶ国として欧米のヒッピーも来るような国だった。ネパールのカトマンズは欧米ヒッピーの終着地点なんですけど、結構その途中の首都のカブールが、ヒッピーの中継地として栄えていたというのです。

確かビートルズも少しいたという話を聞いたことがあります。当時はけっこう開放的で自由で、ミニスカートの女性も居たというぐらいのゆるいイスラム教国だったそうです。

しかし79年に内戦状態に陥り、500万人が難民として周辺国に流れます。特に、東側に位置するパキスタンに多く流れました。このパキスタンにはたくさんの難民が生活しているのですが、パキスタンは貧しい国でもあるのでほとんど何の支援も出来ません。結局アフガン難民は自分たちで生きていかないといけないので物乞いをしたり、2級市民、3級市民のような状況で女性は身体を売るとか、そういったことをしてなんとか生きていました。

90年代になってもそれに対して若者を中心に不満と怒りが募り、タリバンというのを結成するんですね。タリバンはもともとは「タリブ」イスラム法学生、イスラム法を学ぶ人たちという意味なんです。難民キャンプでは結局、パキスタンとか国際社会もぜんぜん支援しないので教育も受けられないし、将来が見えない。それで、イスラム教過激組織、過激な教育をするイスラムのお坊さんとかが、サウジとかの支援を受けて勝手にイスラム教の学校を難民キャンプに造るんです。そこで過激な思想を吹き込みタリバンというのが結成されていく。ベシャワールはアフガニスタンとパキスタンとの国境に位置する町で多くのアフガニスタン人の難民キャンプがありますが、そこからアフガニスタンに侵攻していったタリバン政権ができ、再びアフガニスタンがおかしくなってしまうんですね。

結局、厳しいイスラム教の政権では恐怖で統治はしているけれども公共サービスが全くない、実質上の破綻国家状態でした。しかし、宗教的なこと、イスラム法を厳格に守っていますので、例えば女性は全身を覆うブルカを着て歩かなくては行けなし、女子教育もダメ、歌舞や音楽も禁止。それをやったら首、腕を切られるといった状態です。なので町には男しかいない。その中でアルカイダ、オサマ・ビンラディンが首謀したテロ組織がカブールにやってきます。そこでタリバン政権と結び付いてテロ組織の拠点となって9.11を起こすということになるんです。

9.11が起きて、アメリカ軍を主体とする多国籍連合がタリバン政権を崩壊させ、同時に内戦状態にあった国を、上からの力で押さえ付けてまとめようとしたんですね。そこで何が必要になるかというと、国内に武器がたくさんあって兵士がいっぱ

いいると戦争がまた起こるので、それを減らそうということになり兵士を除隊させ、彼らから武器を回収するという事業を実施しました。NATO軍とかアメリカ軍がこれまで内戦を戦っていた軍閥に対して強制的に銃やロケットランチャー、戦車といったものを出せと圧力をかけ、それと同時に兵士たちを普通の市民に戻すということをしていくわけなんです。除隊するための最後の儀式として、「君たちよくやりました。ご苦労様でした」とたくさんの政府関係者の前で行進して、終わりということをしました。当時は国防大臣のドスタムというウズベク人で多くの人を殺している悪いやつなんですけど、この人が演説して「君たちはこれからアフガニスタンの未来を担うんだ!」なんていうことを演説で堂々と言ったんですが結局今も内戦状態が続いています。

ポスターにもある写真は軍閥から重火器類を回収して、兵士からはAK47などを回収したものです。この元兵士たちは武器を回収した後国連のうちの事務所に来てカウンセリングを受けて、民間人になったら何の仕事をするのか、どんな職業訓練を受けたいのかとか。小口融資で商売したいのかというのを聞いて、そういった支援をする関係団体に振り分け紹介するということをやっていたんです。これは、カンダハールっていう町、地図5のカブールの下にAFG. ってありますよね、アフガニスタンですけど。そののちよつと点ぐらいのところAの字の「。」です。タリバンの首都でもあったところです。カンダハール国際空港はタリバンが政権崩壊してアメリカ軍の最前線拠点になって



地図5 アフガニスタンの首都カブール

て多くの戦闘ヘリが飛んでいました。も

ともとは1970年代前半にアメリカの援助で建てた空港ということもあり、アメリカ軍には手軽といえますか、使い勝手が良かったみたいですね。

しかしながら、多くの努力はしたのですがなかなか治安が安定しませんでした。結局、首都のカブール市内も破壊されたままの状態がずっと続いて、そうこうして

いるうちにまたタリバンが台頭してきて、自爆テロがしょっちゅう旧市街で起きたり、再開された女子教育も中止されてしまうといった状態でした。治安が思ったように回復せず、難民がまた国内避難民となるとという悪循環が起きていました。

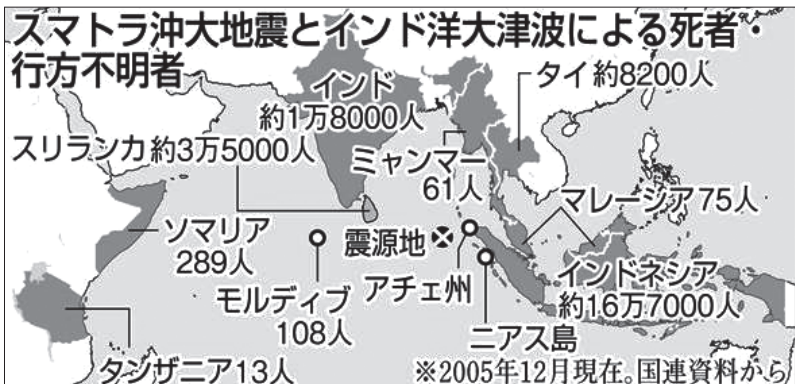
大災害が多発する時代へ

そういった複合的、複雑な紛争が起きる中で、2000年代になってからは大きな自然災害が増えていきました。2004年12月26日にスマトラ沖で大地震が起き、巨大な津波でインド洋周辺13国で約22万人が亡くなり、その支援をすることになりました。私たちの入国は津波から2ヵ月後ぐらい経っていましたが津波の被災地は何もかも無くなってしまいました。

その当時、流されてきた瓦礫が山状になっていて、まだ死体がいたるところから出てきて異臭を放っている状況でした。

アチェ市内全部に電力を供給できるぐらいの巨大な発電船までもかなり内陸に流されてきていました。おそらく巨大すぎて海に戻すことはできないと思いますが、津波の威力というのをまざまざと見せつけられました。

インド洋にあるアンダマン諸島というタイに近い地域の被災者キャンプは本当に悲惨な状況で、こんなところでは誰も長期で暮らせないという状態でした。もちろん日本でも仮設住宅で暮らしている被災者はいますが、それよりも、もっともっと



地図6 スマトラ島沖地震・大津波（2005年）

状況が悪くて非常に苦しい生活だと感じました。

私たちはインドやインドネシアの各地を移動して女性にニーズや問題点を聞いたという調査を続けていました。

JADE-初の援助活動 パキスタン北部地震 (2005年)

アチェの後に、私の仲間と一緒に2005年にJADEという緊急支援を行う団体を立ち上げ、そのすぐ後にパキスタンで大地震が起きて、それがJADEが行う初めての援助活動になりました。

地震が起きたカシミール地方は現在もインドと領有権を争っている紛争地域です。パキスタンのカシミール側からインドのカシミール側にゲリラが攻撃しに行くことはよくあるところで、実際、地震の被災者にも、若い頃によくゲリラ活動を行っていたという人もいて、日常的に国境を超えてカシミールに行ってインド政府軍を攻撃してくるというのが、若者の武勇伝になっていたみたいです。

建物は石造りのものが多くて、地震で崩壊してたくさんの子どもたちが亡くなりました。カシミールは急峻な山岳地帯なので、被災者は家が壊れてしまったとか土砂災害とかで、逃げるところがなく低地に逃げてきて、そこに被災者キャンプを作ったんです。

私たちはその2,000人ほどの被災者キャンプを運営していたのですが、パキスタン政府の意向はなるべく被災者を早く帰したいということでした。そうしないとアフガニスタン難民と同じように、長期でキャンプにいればいるほど政府への不満や怒りが高まり、反政府的な活動を始めたとか、テロの温床になりかねないので、早く帰すべきということでした。私たちはなるべく早く生活を再建させるために女性たちに洋裁教室などを開いて、手に職をつけてもらい帰ってもらいました。みな、帰る時にはテントとか被災者キャンプで配給された物全部をトラックとかバスに乗せて山奥まで運んでいました。



地図7 パキスタンと周辺国

また、地震や紛争が起きるとコミュニティが破壊されて生活基盤がなくなってしまうので、そうしたことから過激思想に走ったり、現状への不満から反政府になってしまったりということがよく起きます。なるべくそういう事態にならないように引き止めるとか、もしくは元の暮らしに早く戻すようにするということが求められていました。

また、ユニセフの仕事として山の中の小学校に水とトイレを提供するというのもやりました。それと同時に小学校では子どもたちを集めてご飯食べる前にちゃんと手を洗いましょう、トイレに行ったら手を洗いましょう、そういった衛生教育もやっていました。

水タンクに、湧き水を貯めて学校に給水しましたが、一部の村の人々が私たちのところに来て、「学校へ給水するんだったら、一部資金を提供するし、労働力も提供するの、村まで引かしてくれないか」といつてきたのです。それはもう大歓迎で、水源から小学校までは私たちがメインのパイプを引くけど、途中から村の中まで入るパイプは自分たちでしてもらいましたがすごく喜ばれました。

ペルー大地震復興支援（2008年）

次に行ったのがペルーです。地震は首都のリマから南の方にある砂漠地帯、乾燥地帯で起きました。そもそも貧しい地域で、乾燥地帯なので、アドベ（Adobe）といわれている乾燥したレンガで家を建てていたのですが、結局、柱とか建物の芯がないのでみんな崩れてしまったんです。それでたくさんの人が亡くなり、生活基盤もなくなってしまいました。

もともと出稼ぎが多くて、季節労働者の貧しい人が多く、教育も受けていないので共産ゲリラの影響を受けやすい地域です。アフガニスタンやパキスタンも似たような状況でしたが、紛争とか災害が起きると生活基盤が破壊されて暮らせなくなる。それで不満がたまり、怒りがたまる、ペルーの場合は共産ゲリラですが、アフガニスタンとか他の場合はイスラム教徒の過激派となっていくというパターンです。それを少しでも止めたいということで、なるべく早めに生活再建、まずは家を立て直すことが大事になるわけです。

このJICA事業として行ったこととしては、被災者のところへ行って、崩れた家々

を周り被災者にインタビューをして、どういった支援が必要ですか、自分たちではどういったことができますかということなどを聞いて、それをプロジェクトにしました。ワークショップではみんなに発表してもらって、住民から、「こんなことしてもらったことない」と言われて、「本当にあんたたち、ペルー政府から来たの？あんた、共産ゲリラじゃないよね？」ということと言われながらやりました。「ちゃんとペルー政府の御墨付きをもらってやっているんですよ」っていうことなどを言って。それぐらい稀なこと、そういった末端の貧しい人たちになかなか国や支援の手が届かない状況が普通でした。

その調査結果を基にペルー政府に政策を提案しました。まず耐震住宅が大事ということで、泥壁や乾燥レンガではなくて、ちゃんと鉄筋を使った建物が必要で、お金はかかりますが、その部分は政府が融資しようというものでした。でも、住民側にもそのための耐震の知識が必要だということをわかって欲しいということで、それで3匹の子ブタを模した演劇にしました。3匹の子ブタの話では、オオカミがふーふー吹いたら息で家が飛んでしまう。最初が草の家、次が木の家、最後がレンガの家ですが、この劇では草、木、耐震の家と変えてやってみました。写真3はたしかヒヨコのお姉さんなんですけども裏にオオカミがいて地震を起こすんですね。オオカミが地震をなんで起こすかよく分かんないんですけど（笑）。劇にして耐震の重要性というのを子どもにも知ってもらって、将来的に大人になったら、自分も耐震の家を作るようにということを教育したんですね。

写真4は、マチュピチュです。マチュピチュにはインカの都であったクスコか



写真3 3匹の子ブタを模した演劇の様子



写真4 マチュピチュ

ら入ります。子どもの頃、ブラジルに住んでいた時にもマチュピチュには行ったことがありましたが、当時はマチュピチュにもクスコにも本当に観光客が居ませんでした。

というのもそれまではセンドロ・ルミノソをはじめとする、共産ゲリラがテロだとか誘拐、暗殺をしていて、これが山岳地帯に拠点を持っていたので簡単には行けませんでした。その時は武装したボディーガードを連れて行ったのを覚えています。

ご存じの方も多いと思いますが、日系のフジモリ大統領になってからは、治安政策で情勢が安定して、すごく発展している。フジモリ大統領は、治安政策をあんまりやり過ぎたとして現在は人権侵害で刑務所に入っていますが。

写真ではあまり人が映らないように撮ったので居ないように見えますが、本当はいっぱい居ます。最近ではあまりにも多すぎるとして入場制限をかけるというくらい多いらしいですね。それぐらいマチュピチュは世界遺産として一大観光地になったペルーの稼ぎ頭です。

ペルーにいる間に、ナスカの地上絵のハチドリも見に行きました。この地域は昔、無風状態だったので、こういう地上絵を描いても飛ばされないというか砂が入って来ないということだったらしいのですが、最近の気象変動などでけっこう風が吹いて、だんだん地上絵が薄くなってきていると言われています。何年かしたら見えなくなってしまうかもしれないから早く見に行ったほうがいいよっていわれて行ったんですけど、それは素晴らしい景色でした。

コンゴ民主共和国平和構築支援（2009年）

次はコンゴです。内戦が続いていたこの国では、モブツ・セセ・セコという独裁者が死に、ローランデジレ・カビラという元ゲリラのリーダーが1997年に政権を握って名前をザイルからコンゴ民主共和国（Democratic Republic of the Congo）に変えました。

コンゴ民主共和国はアフリカ大陸の中央部に位置していて、隣にコンゴ共和国（Republic of Congo）というがあるので混乱しやすいのですが、通称、「コンゴ民」とか英語ではDRCと呼んでいます。

首都キンシャサは特別市ですごく大きな都市です。このキンシャサでコミュニ

ティの開発、市民教育を行いました。キンシャサは、ずっと内戦が続いたおかげで公共投資や公共事業などが全く行われず、ゴミとかも捨てられるがままの状態です。マフィアが住民からお金を取ってごみ捨て場を作っていましたが、捨てるだけで何もしないため、ものすごく臭く汚く、環境破壊の象徴となっていました。

その原因となったのは1998年から2000年までの間に、最大で500万人が死亡したといわれるアフリカの世界大戦と言われている戦争です。実はその原因は先に話したルワンダ難民でした。先ほどスライドでもお見せしましたが、ルワンダ難民がたくさんザイル、今のコンゴ民に入って反政府ゲリラと一緒に悪さをしたんですね。同時に、元から緊張関係があったため内戦が一気に爆発しコンゴ民全土に広まってしまった。それに対して周辺の国々が介入したのです。特にコンゴは、ウラン、金、ダイヤモンド、地下資源がとても豊富なこともあり、イスラエルもこの紛争に参加したというとてもない内戦でした。

キンシャサではコミュニティ開発をするためにはまず市民教育が必要ということになって、初めにワークショップを各地で開いて、ファシリテーションを学んでもらいました。単に議論するだけではなく、どうしたら個人ではなく地区単位で物事を考えて議論をするのか、どうしたら対立せず人々を巻き込んでいけるかということを勉強する中で市民教育を行っていきました。他にも、女性に対する暴力や性的虐待など女性を取り巻く問題が多くあるので、こういう事を無くしようという



地図8 コンゴ民主共和国平和構築支援キンシャサ市



写真5 女子校での勉強会の様子

ことを、各地区で小規模に分かれて議論して学んでもらいました。また、特にコンゴ民は、エイズが蔓延していたので、女子校にも行って不純異性交遊をしないようにする事も大事ですと、そういったことも勉強のポイントとして学ぶ機会を作りました（写真5）。

“赤シャツおじさん”

各地区で小規模に分かれて集まり、ワークショップや勉強会を開催する中で面白いエピソードがありました。いつも赤シャツを着ているので「赤シャツ」と呼ばれていた要注意人物のおじさんがいまして、問題児というか問題おじさんで、私たちがプレゼンなどをやっている、必ず何か嘯み付いてきて「こんなの出来ない。こんなのおかしい。」とか「日本人がなんでこんなことやるんだ、やらなくていいじゃないか」とか常に文句を垂れて妨害していたんですね。でも、ワークショップを経験したり、勉強会に参加してもらい、さらにファシリテーションとかを学んでもらうと、実はこの赤シャツおじさんは地域の問題を理解して積極的に解決しようとしてくれるすごい良い人になりました。よく日本でも文句をいうおじさんやおばさん、クレマーなどがいますが、実際その人たちというのは、ファシリテーションのスキルを持っていないから文句を言ったりするのであって、そもそもは地域が抱える問題点などをちゃんと知っている敏感な人たちなので、ファシリテーションなどを学ばせてうまく活用すれば、この赤シャツのおじさんのように化けるんじゃないかなと思います。

やはり大事なのは地域全体を巻き込むことです。プロジェクトをしていた地区の区長が音頭を取って地元で有名なバンドを呼んでコンサートをしました。何万人ものすごい人が集まったのですが、コンゴ民の昔から伝わる伝統の踊りなどもやりました。

とは言え、本当は有名なバンドが来るはずだったんですけども、最終的にギャラの折り合いがつかなくて、前座が本座になってしまったというコンサートでした。ギャラを「区長が持ち逃げしたんじゃないか」という噂もあったんです。マネージャーがギャラのキックバックをあまりにも要求しすぎて、ギャラが払えずに逃げちゃったっていう、なんかアフリカっていうかコンゴらしいなって思ったイベントでした。

スリランカ内戦国内避難民支援 (2009年)

次は、内戦が続いていたスリランカです。

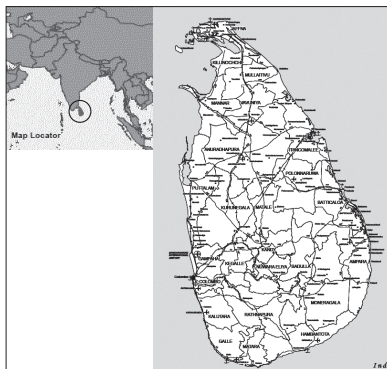
スリランカは、インド系でタミル語を話し、ヒンドゥー教徒のタミル人と、仏教徒でシンハラ語を話すシンハラ人が暮らしています。シンハラ人が多数で、約75%を占めます。イギリスから1948年に独立した後、ずっとシンハラ人優遇政策を取っていました。シンハラ語しか使えない、もしくはシンハラ人しか役人になれないという、タミル人を差別するような政策を続けていました。

それに反発したタミル人たちによって、タミル・イーラム解放の虎・LTTE (Liberation Tigers of Tamil Eelam) が結集され、タミル人の独立のための武力闘争がその後23年間続きます。最終的にはLTTEは全滅させられてしまうのですが、タミル人が多く、戦闘が多かったスリランカ北部一帯から国内避難民として逃げてきた人たちに対して私たちは食料援助をしました。食料援助といっても国連が米など主食を提供してくれたので、私たちはスリランカでもよく食べるカレーのスパイスやタマネギ、ニンニクなどを配りました。

避難民キャンプの支援が終わった後は住民の再統合支援として職業訓練校を作ってタミル人の支援を行いました。

スリランカ内戦の場合、タミル人は人口が少なかったので子どもたちを根こそぎ兵士に仕立て、少年少女兵がたくさんいたのです。その子たちをちゃんと教育し、社会復帰をさせなければ再び紛争の原因になりかねないということで、左官と大工の国家資格を取る職業訓練を始めたのです。

その際、大事ななのは、地域の住民にも入ってもらいプログラムを理解してもらうことで反発を防ぐということなのです。外部者が支援に入るとき「なんでこんな仕事をするんだ、なんでこんな人たちを選ぶんだ、えこひいきじゃないか」と思われたりするので、それを避けた



地図9 スリランカ

めに住民説明会を開いて「私たちはこんな人たちとこんなことをしますよ」と話してから始めるんですね。さらに元兵士だった若者たちにもそういう説明をし、さまざまなカウンセリングをして職業訓練を行いました。

訓練を受けていたある元少女兵は、昔ネックレスの中に青酸カリをぶら下げていたそうです。もし政府軍に捕らえられて拷問されたりとか、レイプされることがあったらその前に死ねということで青酸カリを持たされていたわけです。そういうこともあって、この少女たちの表情や雰囲気が暗いんです。影があって、やっぱりなんかあったんだということがわかるんですね。そういう若者たちが職業訓練の最終的な仕上げの実地訓練として地元小学校を建設しました。20歳前後の若者たちが、半年の職業訓練で本当に建ててすごいなと思いました。最後の引渡式は、少年兵・少女兵として戦った若者たちがコミュニティに貢献するというかたちで社会復帰する、すごく象徴的な素敵なセレモニーでした。

ちなみに国家試験は全員が合格しました。この試験に合格すると単なる土木作業員ではなく、現場監督の資格が得られるので、タミル人だとかシンハラ人だとかの差別がなく、資格を活かしてスリランカ中の建築現場で現場監督して働けるため、すごく需要がある資格です。その内2人は中東に出稼ぎにいきました。

ウクライナ内戦国内避難民問題（2018年）

次はウクライナになります。去年、ウクライナに社会統合のセミナー講師として行きました。ウクライナは2014年から内戦が起きています。それがドンバス地方といわれるロシアとの国境地帯にある東部に、かなりの人数のロシア人、ロシア系住人がいます。ドネツ炭田というのを聞いたことはありませんか。昔、巨大なコンピナートがあって、一大工業地帯になっていたのです。中学の時に、地理でドネツ炭田、コンピナートというのが記憶にあって、現地へ行ったときにそのことを聞いたら、「今は何も無いよ」と言われました。何が起きたかという、ソ連が崩壊して各共和国に分かれた時に、ロシアが全部持って帰ってしまったというんですね。昔、戦争で日本が負けたときに、それまで日本領土だった朝鮮半島や満州でも、ソ連とか中国が全部持っていったというのと同じようなことが起きました。ロシア人って根こそぎ持っていくのが伝統なのだなのを感じました。

独立したい、ロシアと併合したいという人たちがいて、ウクライナ領土のクリミア半島は、結局2014年にロシアに強制的に併合されてしまいました。この紛争で、人口約5,000万人のうち180万人が国内避難民としてウクライナ西部に入ってきました。

ウクライナは最近大統領選挙があってコメディアンの方が大統領になりましたが、そもそもなぜ内戦が起きたかという、前々大統領がEUに入るか否かで錯綜してしまったんですね。議会では準EUとして加盟することになっていて、

その準備をしていました。しかし、おそらくロシアのプーチン大統領の差し金だと思いますが、当時の大統領が突然、準EU加盟を止めると宣言してしまいました。そのため政府が混乱して反政府デモとかも起きて、そのとき彼は亡命してロシアに逃げちゃうんですね。それで内戦になって、ロシアとの国境地域は戦闘が特に酷かったようです。

地図を見ていただければわかるとおり、実はウクライナはヨーロッパでは一番国土の大きな国です。海外領を含めると実質的な面積ではフランスが大きいのですが、単一の領土としてはウクライナが一番大きいんですね。もしウクライナも西側、特にNATOに入ってしまうと、ロシアにすれば剣を喉元に突き付けられた状態になるという意味で、非常に危機感を感じたのでしょう。ポーランドもNATOに入ってしまった、さらにウクライナも西側になってしまうと、ロシアとしては戦略的に非常に困ってしまうわけです。

国際政治的には緩衝地帯としてウクライナはどこにも属さないのは仕方ないというふうに思っていて、西側はちょっとやり過ぎたのかなと思います。

私が社会統合についてのセミナーを行ったウクライナの国境地帯の町ではロシア側から毎日のように砲撃されているということです。国境を超えてロケットや砲弾



地図10 ウクライナ
(点線部は東部のドンバス地方)

が飛んできて、学校など建物が破壊されていると言っていました。セミナーでは、たくさんの国内避難民が東側、首都キエフを中心に来ているので、平和と一緒に暮らせるようにするにはどうしたらいいかというようなことを発表し、皆で話し合ったりしたりしました。

ロヒンギャ難民支援（2018年）

先々週までロヒンギャ難民支援に行っていたんですけど、今また大きな問題になっています。ロヒンギャがいるエリアはもともとミャンマーのラカイン州というところ。ラカイン州にあるシットウェという港町は、中国が一带一路の港として借り上げようと、現在、港湾開発をしています。なんでそうするかというと、中国はマラッカ海峡を通らないと上海とかの沿岸部の工業地帯に地下資源、石油を輸入することができないんですね。だからもし、アメリカ軍だとかその同盟国がマラッカ海峡を封鎖してしまっ



地図11 ミャンマー南西部のラカイン州

たら、中国は干上がってしまう。そのため、中国はミャンマーの港湾都市シットウェを長期に借りて港湾開発をし、パイプラインと鉄道を引こうという計画を進めています。そこに、ロヒンギャの人たちが住んでいたのが邪魔になったのです。だから、彼らをどかして中国の資本を使って経済開発をしたいというミャンマー政府と資源ルートの確保がしたい中国政府の思惑が一致して、それで中国の後押しを受けてロヒンギャの人たちを追放したと言われています。ロヒンギャ難民のキャンプがある地域是那覇市の3分の1くらいにの本当は小さなエリアなんですけど、ここに約90万もの人たちが住んでいます。数日前にも報道されていましたが、今はものすごい雨季の真最中で大雨が降って、彼らの住んでいるビニールシートで作った家なんかは水浸しになってしまっているの、リロケーションといって難民をどこかに移そうか

ということになっています。

子どもは国境を越えているので「難民」と言っていますが、日本の外務省とかは、ミャンマー政府に遠慮して、難民とはいわずに「避難民」といっています。ミャンマー政府は彼らを国民と認めておらず「不法滞在者」と言っています。もとから国籍が無いのだから難民じゃないという、すごいレトリックですが、それを日本政府も言っている。結局、ミャンマーでの経済進出というのに絡めてすごく遠慮していて良くないと思います。しかも、バングラデシュも難民といってくれない、呼んでくれるなど言っています。バングラデシュ政府も「強制的に移動させられたロヒンギャの人々」というふうに言ってくれと言うんです。バングラデシュはバングラデシュ政府で、実は、難民条約に加盟していないのですが、国際社会にもミャンマー政府にもいい顔をしたいという思惑があります。怖いことにASEANで難民条約に加盟しているのはカンボジアだけです。なぜカンボジアしか入っていないのかというと、実はカンボジアはかつてUNTAC、明石康国連事務次長が国連代表として、カンボジア暫定統治機構にいた時に様々な国際条約に加盟しました。それがあってカンボジアは難民条約に加盟しているけれども、ASEANの他の国は全然入っていない。だから難民たちを不当に扱っても、というのは語弊がありますが、そもそも条約に加盟していないので支援をしなくてもそんなに非難されないという実状があります。

紛争から平和へ：街づくり、人づくり

これまで、いろんな紛争を経験し、紛争地域へ行って援助活動を行ってきた中で、一番感じたのは、最も被害を受けているのは市民であり、女性、子どもだったということですね。

それと同時に不満を持つのも被災者であり難民、避難民となった市民なんですね。その不満が、時に「戦争した方が良い」といった過激な思想になったりします。これまで各地でそうなってしまったことを見聞きしていくうちに、そうならないような人づくりやまちづくりが本当に重要なんだということに気が付かされました。紛争を選んだり戦争することを選ぶのは国の指導者や政治家ではありますが、その支持をするのが市民であることを考えると、民主国家の場合は紛争や戦争を選択するの

は市民でもあると思います。つまり、指導者が「戦争しなきゃだめだ」「戦争しか解決策がない」といったら、それに対して住民が「そうだよ、そうだよ」とならないようにしなくちゃいけないわけです。われわれ市民がそういった気持ちにならないためには、やはり多くの人々がつながってまちづくり、人づくりが重要ということになるんじゃないかと思います。

私は2015年にイタリア人の妻と沖縄に移住しました。それまでミャンマーで暮らしていたんですけども、これまでもシンガポールとかスリランカといった暑い国で暮らしていたので、「なんか寒い国は嫌だね」と、そうかといってイタリアに行くのも、日本の本土、内地に行くのも寒くて嫌だ、じゃあどうしようかというときに、妻が「でも沖縄があるじゃない？」と言うので「ああ、そうだね」という話になって沖縄に来たという、とてもいい加減な移住なんです。

でも、私は移った先で人づくりとかまちづくりに関わりたいとずっと思っていたんです。なので、住んでいる那覇市がやっている「なは市民協働大学院」に参加して、受講生と一緒にいろんなまちづくりについて議論する機会を得ることができました。

それをきっかけにスピンオフとして、富山県と石川県に視察旅行に行ったりしました。まず、富山県でやっている「コンパクトシティ」が実際どうなのかということを見に行きました。

例えば、富山市内では若い人たちがミニシアターをやっているのですが、そのモチーフが実は桜坂劇場だというんですね。桜坂劇場というのは、ミニシアターをやってきた人たちにとってはなにか聖地みたいな感じで、素晴らしい存在として位置づけられています。我々も沖縄の那覇から来たという話をするとか「ああ、桜坂ですね、素晴らしいですね」といった話もしました。その他、市民カフェという、料金はお茶代を払うことで市民活動の打ち合わせとかができるスペースがありました。

石川県では、もともと豆腐屋や何か商売をしていたお店が廃屋になってしまっていて、持ち主が使ってもいいと無料で提供してくれたスペースを市民コミュニティーカフェとして使っていました。金沢工業大学では、大学の一部のスペースを市民に開放して、大学生と一緒に街づくりについて話し合いをするような場として提供していました。このスペースは金沢工業大学の学生がレイアウトをして家具類

を作ったり、リフォームとかもしたりして、協働の街づくりの意識が芽生えていているようでした。

最終的に、なは市民協働大学院で第5次那覇市総合計画の市民案として策定し、佐藤先生を副委員長とする那覇市総合計画審議会と城間市長に提出しました。

沖縄からできること：アジア、東南アジアとの近さを生かした平和の拠点

次に私たち沖縄の市民がどういうふうに関わるのかということを考えていきたいとおもいます。米軍基地がたくさんありアメリカ人は見慣れていると思いますが、最近、コンビニのレジなどでネパール人をよく見かけると思います。なんでそんなにいるのか考えたことがありますか。単に彼らは、日本語を勉強しに来ているからじゃないんです。2015年にネパールで大きな地震が起きました。山岳地帯のネパールはインドに囲まれた内陸国で、産業といったら観光ぐらいしかありません。それが大地震によってほぼ崩壊してしまいました。同時に、その年に憲法改正をしました。もともと王国だったネパールは、クーデターなどのいろんな政変が起きて民主化されました。一方で、毛沢東主義者のマオイストといわれているゲリラがいっぱいて、各地でテロ活動を起こして政情不安になっていました。政権が民主化されて多党制があった時期もありましたが、憲法改正で議員はそれぞれの民族から出すという事に決まりました。そうすると、少数派であるインド系とかインドに近い人たちがあおりを食ってしまうと、インド政府が反発して、2ヵ月間国境を封鎖してしまいます。国境を封鎖することで食べ物や燃料とかが全く途絶えて大混乱になってしまいました。ただでさえ大地震で唯一の産業である観光が落ち込んで経済危機になっていたのに、追い打ちをかけるように、インド政府が経済封鎖をしたので、少ない仕事が無くなり、失業者があふれることになってしまうのです。結局、国民が各国に出稼ぎに行くしかなく、さらにその一部が沖縄に来たという経緯です。なので、単に沖縄で日本語を勉強するための人たちではなくて、ヒマラヤの奥の山岳地帯の本当に何も無い所から、日本語を勉強するという名目に出稼ぎをしているということなので、今度レジで会ったら優しい目で見てあげてくれればと思います。

さらに視点を移しまして、沖縄の地理的位置づけの観点から考えていきたいと思

います。沖縄は東京・政府の中心部から離れている分、いろいろな問題が押し付けられたり、われわれ県民、沖縄の声を聞いてくれないということがありますが、逆に遠いので自由でもあると思ったりします。沖縄は東南アジアに近く、たくさんの観光客が来る。沖縄は島が点在している島嶼県なので、1つの県ですが多様な文化や社会がある。沖縄を中心として円を描くと3,500キロくらいでアジア全体が入る。つまり、アジアの国ともっと仲良くしてもいいのかなというように思ったりします。東京、中央との距離の遠さと東南アジアの近さというのを今後うまく使える政策、もしくは経済発展というのを考えてもおもしろいかなと考えます。

一方で、3,500キロ圏内の先には中国があって、沖縄が蓋をするような戦略的・軍事的位置にある、だから米軍基地があるということもありますが、それを克服するかたちで、なにか新しい沖縄の政策なり、アジアに近いという位置性についてもみんなで考えていければと思います。

以上です。皆さんの質問や、コメントを是非伺えたらと思います。どうもありがとうございました。

○佐藤学 沖縄法政研究所所長

時間まで、田中さんにとにかくたっぷり話していただきました。ありがとうございます。馴染みのないような土地やあるいは自分たちがよく知らない紛争の話、たくさん出てきたと思いますが、何かご質問がありましたら、どのような事でも結構ですので、お願いいたします。

●質問者 1

素朴な質問なんですけれども、現地では何を召し上がられていましたか。あと支援する国というのはどういった基準で決めているのでしょうか。

○田中洋人

ありがとうございます。食べ物ってけっこう大事ですね。自分1人だったら構いませんが、チームで行った場合は日々の仕事の士気に影響するので食べ物がけっこう重要です。最初に行ったザンビアは5人の全員男のチームで行ったんですけど、

私は最年少の二十歳でコックをしていました。5人分を全部作るのは大変だったので、私はシェフみたいな感じで、あなたはジャガイモを切ってください。あなたはニンジンとピーマンを切ってください。あなたはタマネギを切ってくださいと指示して、最終的に私がカレーにするとかしていろんな料理をしていました。食事はかなり美味しかったみたいで、いまだに「田中の飯はうまかったな」みたいなことを言ってくれて、それは良かったと思います。

でも、材料の調達はけっこう大変で、日本で売っているようなものは売っていないので、キャンプにある市場で売っていたキャベツとかニンジン、タマネギぐらいで毎日なんとか料理をしていました。肉も売っていなかったのでバイクに乗って難民キャンプにニワトリを買いに行き、鶏肉ほしいんですけどと言ったら、難民のおじさんが「あれ、いいよ」と指を差して言ってくれた後、ニワトリを子どもと一緒に追っかけて捕まえて、自分たちで絞めて食べてました。

難民にはさきほどスリランカのキャンプにあったように、タマネギとかスパイスを配ったりという食の多様も大事ですね。食料援助があっても、結局、トウモロコシか米とかしか配給しないので、カロリーは十分ですが、動物園の餌ではないので人間は多様な食が不可欠です。一方、さっきお話したコソボ難民にはパンを焼いて配ってしかもキッチンカーが出て、3食みんなそこで食べていました。ものすごい経費が掛かっていました。

次の支援する国を選ぶ基準についての質問ですが、いろいろありますが、私の団体としては行ったことがある国とか、やりやすいところという点があります。なにも知らないで初めて行く国というのは、組織を作ったり政府との交渉とかもあって大変なので、結果的に行ったことがある国というのが多く、それでバングラデシュが多くなったのかなと思います。良い質問ありがとうございました。

●質問者2

今、世界の裕福な国はたくさんありますね。日本とかアメリカとかのたくさん余っている食料をそういう所に分配してやった方がいいと思うんですけど、そのところのいいか？なんでしょうかね。

○田中洋人

はい。日本政府はおもしろいって言ったら変ですけど制度を悪用しているということがいえると思います。日本はWTOに加盟していて、本来であれば米市場も開放しないといけませんが、輸入を禁止しています。本来禁止はダメなので、WTOにはその代わりにミニマム・アクセスといって最低限は入れないといけないという取り決めがあります。そこで何が起きているかという、輸入したタイ米、中国米、アメリカ米を援助物資として海外に送っている、国連の食料援助をしているWFPにお金をつけて配ってもらっているんです。そういうふうにして日本の米は守られているわけです。一方でアメリカなんかは自分たちの農家を守るためにトウモロコシをいっぱい買ってそれを難民に配ったりしている。だから一時的に食料に困っている難民キャンプに配るというのは良いんですけど、食料支援が長期になると結局その国の農業が破壊されてしまうんです。すごい矛盾を感じたんですけども。いかがでしょうか。

●質問者2

それだと農業は？

○田中洋人

破壊されてます。結局、安いというかタダで食料が入ってくるわけですから。先ほど紹介したフード・フォー・ワーク、働いてもらって賃金の代わりに食料を配る、それでいっぱい配るんですよ。1人4.5キロという基準があって、10日働いたら45キロですが、家族がいても45キロってなかなか食べられないですから、結局余ったら売るんですよ。売ると、その食料は安く市場にまわってしまい値段も下がってしまうので、農家は米とか小麦を作る意欲が無くなってしまいます。10日ごとにある食料の給料日に、食料の買い取り業者がトラックで来て、買い取って現金を渡してということが起きていましたね。だから、もちろん食料が安く安定的に入ってくることはとても大事なんですけど、一方であまりに安い食料が入りすぎちゃっているというジレンマもありますね。

本当に良い質問ありがとうございます。講演の中で説明したかったんですけど、

そこまで言えなかったのも、どうもありがとうございました。

●質問者3 (野添文彬・沖縄法政研究所所員／沖縄国際大学法学部准教授)

本学で国際政治を教えていますので、そういう意味でも貴重なお話ありがとうございました。2つ質問があります。1つは、非常に興味深かったのがワークショップを通して地域で平和構築の勉強会をされるというお話でした。元々、文句ばかり言ってた人がよき理解者になったという「赤シャツおじさん」の話もありましたけども、紛争地の市民をどういうふうにワークショップに参加させて地域を作っていくのか、やる気にさせたり、住民を巻き込んでいくためにどのような工夫をされてきたのかということがお伺いしたいです。

もう1つは沖縄の事なんですけれども、先ほどアジアとの地理的近さという優位性を指摘されたと思うんですけども、それに加えて沖縄に生活されていて、沖縄における歴史とか知見であるとかそういうのがどういうふうこれから平和に役に立てそうかというようなことを伺わせてください。

○田中洋人

はい、貴重な質問ありがとうございます。まず、どのようにインボルブしていくかということですが、だいたい地区にはリーダー格の人たちがいて、そういう人たちの中に世話焼きのおじさんとかおばちゃんとか学ぶことが好きな人もいます。そういう人たちを通して「こういうことをやるので集まってくれませんか」ということでまず来てもらって、その人たちを通してまた芋づる方式で更に他の人たちを呼んできてもらうという事をしていました。だから、時には「地雷を踏んでしまふ」みたいな、赤シャツおじさんみたいなのも来るんですけども。一方でそういった赤シャツおじさんも、ちゃんと勉強してもらえばすごくプラスになる。そもそものポテンシャルがあるから、振り子が左右に振れるように、プラスからマイナスに行くような感じになるんで、そういった人にも注意しながらやっていました。

今後の沖縄の知見についてはあくまでも個人的な意見ではありますが、沖縄戦の経験を制度化するということも重要なのかなと思っています。ということかというのと、沖縄は、日本で唯一の地上戦で多くの市民が亡くなったという記憶を、戦争

は悲惨だと語り継いでいくことも大事ではあります。それを生かしながら、戦争をしないための制度として、紛争とか戦争を選ぶようなことをしない指導者づくり、選択肢として戦争はしないんだというようなシステムを作っていくことも大事だと考えます。

講演の途中でも、紛争が起きるとコミュニティが破壊されて生活基盤がなくなってしまうて、そういったことで過激思想に走ったりとか、反政府に注目したりだとか、難民生活での不満が過激思想を誘因するといったことをお話ししました。

かつて日本がABCD包囲網でいろんな国に圧力をかけられて、最終的にはアメリカにハル・ノートで追いやられてしまった部分もありますが、我々はプレッシャーがかかると、つい「えい、やっちゃえ」とやってしまいがちですが、そこで踏みとどまり戦争じゃない方法をもっと考えるべきであって、我々自身がそういう選択をしない指導者を選ぶという事を制度化することも大事なのかなというふうに思っています。

といいながら、最近アメリカや中国を見ていて思うことは「国民国家の限界」です。両国とも主権、国民、領土が絶対視されている国家ですが、しかし、あれだけ大きな国、影響がある国の指導者が自国民だけで選ばれる。中国は中国共産党の中の政治で選ばれるだけなので、アカウントビリティもなければ厳密には自国民にも選ばれてない（自国民が選んでいるわけでもない）ですけど、そういったすごく影響力を持っている国が、世界の人たちから選ばれないというのがおかしいんじゃないかなと思っています。もうすでにITをはじめ様々な科学技術の進歩で人、物、金の流れが自由なのに、国家だけが国民国家の古い枠の中に納まり続けているってというのは、今後考えていかなければならない、ゆくゆくは世界連邦的なものがないと、もう立ち行かなくなってくるのではないかなという気もしています。

一方で、そういった将来が見通せないから先祖返りじゃないですけど、また分断になって少数民族の一部の人にしわ寄せがあったり、EUが崩壊しかけているという部分もあったりします。だからもっと未来を考えていく、新しい仕組みを考えていく、オープンな考えをもって行くのも大事なのかなと、ここ沖縄で考えていけたら良いのかなと思っています。どうもありがとうございました。

○佐藤学 沖縄法政研究所所長

田中さんどうもありがとうございました。紛争や自然災害地域での田中さんの活動から、関心が災害地支援から平和構築をどう受け止めるか、いわば人づくり、街づくりというところに繋がるというお話が、私の中では非常にすっきりと入ってきたというふうに思いました。本当にありがとうございました。では、最後、閉会の挨拶を副所長の伊達先生、よろしくお願いします。

【閉会】

○伊達竜太郎 沖縄法政研究所副所長

ただいま紹介いただきました沖縄法政研究所副所長の伊達でございます。本日は、世界中を飛び回っている田中さんから、まずは冷戦時代の話、テロのお話、また災害などの貴重なお話を聞くことができました。もっと聞いていただきたいことはたくさんあるかと思いますが、時間がまいりました。まず、田中さんに、今一度大きな拍手で御礼を述べたいと思います。ありがとうございました。また、お忙しい中お越しいただきました、お集まりの皆さま方にも厚く御礼を申し上げたいと思います。

現在まさに田中さんが話しましたように、さまざまな地域で紛争が生じたことによって生じている難民問題は、多くの地域で起こっている問題であります。本日の田中さんの経験上のお話は、まさに直に聞かないとわからないような生々しいお話もたくさんありました。例えば、お水に関して、私たちは生活していくうえで普通に使ったり飲んだりしていますが、それもなかなか無い地域というものもあるという話を聞きました。紛争もいまだにどこかの地域で内戦も含めて行われていたりもしています。また、災害について、日本は地震が多いですので、それも身近なお話として考えていけるとと思います。今回、難民問題を含めまして、沖縄でも私たちができることを考えるきっかけになりましたら幸いです。また、私たちも、途中で話に出てきたコンゴの赤シャツのおじさんのように、まさに文句を言うおじさんから、前向きになるおじさんのように変わっていければ良いのかなと考えました。本日は誠にありがとうございました。今後とも、沖縄法政研究所の活動にご協力を賜りますと幸いに存じます。それでは本日の講演会を閉会とさせていただきますと思います。